3. カムイとともに

①「カムイ」って何だろう？

(上)「オッパイ山大祭」でのカムイ(神)への儀式「カムイノミ」。上士幌ウタリ文化伝承保存会。(上士幌町・東泉園；※2)

(右) オッパイ山(※3)はアイヌ民族の聖地とされる。(上士幌町十勝三股から)

「カムイ」はよく、アイヌ語で「神」のことだといわれます。まちがいではないのですが、人間よりもはるかにえらい「神様」とは、少しちがいます。

私たちにとって、人間以外の生き物や自然（現象）は、命のもとであり、人の役に立つものであり、一方で、かなわないほどの大きな力を持ったものです。

すごく身近なのだけれど、人間の力がおよばないところを持った存在、尊敬して、感謝しながら利用もする相手、中には悪さをするヤツもいる、そんな「自然」が「カムイ」なのです。

この世はカムイ（自然）とアイヌ[※1]（人間）で成り立っているのです。

ヒグマ。山の神(キムンカムイ)は、家の壁にかけてある毛皮とツメをつけ、クマのすがたになり、その毛皮と肉をおみやげとしてアイヌモシリにやって来てくれる。　(写真：辻博希氏)

「目的」を持っている自然の生き物

伝統的なアイヌ文化では、アイヌ（＝人）の世界である「アイヌモシリ」とカムイの世界である「カムイモシリ」があります。

自然界にあるものは、動物や植物でも、カムイモシリから「何かの目的[※4]を持って」アイヌモシリへ来た存在なのです。

例えば、木をただ切りたおしてしまうということは、仕事をするために外国から来た人を、何もいわず、何もさせずに送りかえしてしまうのと同じことです。あるいは、説明もせずイヤな仕事をさせることです。そんな失礼なことができるでしょうか。

舟などの材料にするというような理由がある時に、ちゃんと説明して、「私の役に立ってください」とお願いするべきでしょう。

カムイに語りかける

これらカムイに対して語りかける時は、直接ではなく、木をていねいにけずって作られた祭祀具[※5]である「イナウ」や、うすくヘラのようにした「イクパスイ」を使います。それらを通すことによって、言葉がカムイに正しく届くのです。

家（チセ）の外の川上側にはヌサ（祭だん）がおかれ、イナウが立ちならんでいます。

火のカムイ（アペフチカムイ）は、人間の身近にあり、ほかのカムイとの仲立ちもしてくれるので、日々の生活の中でも儀式の時でも、必ず祈りをささげます。

(上) たくさんの「イナウ」が立てられた「ヌサ」。
(左)「イナウ」をささげ、「イクパスイ」を使っているところ。
(『オッパイ山大祭』上士幌町・東泉園)

※1　アイヌ：アイヌということばには、①(神や動物に対しての)人間、②(メノコ(女性)に対しての)男性、③(民族名としての)アイヌ、などの意味がある。(参考：『アイヌ語沙流方言辞典』より)
※2　東泉園(とうせんえん)：上士幌町字上音更(→p120・p129・p131)
※3　オッパイ山(オッパイやま)：上士幌町と足寄町の境にある、ピリベツ岳と西クマネシリ岳の二つの山。三股(上士幌町)から2つのオッパイに見えるのでこう呼ばれる。

②「カムイ」としての川

(上) 歴舟川（ペルㇷﾟネイ・大樹町）。

(右) 歴舟川の支流である歴舟中の川（ルウドルオマㇷﾟ）上流には、その名も「神威岳（カムイヌプリ）」がある。

川（ペッ、ナイ）はアイヌ民族にとって、水や食べ物をあたえてくれるところであり、道でもありました。今でも、水道水の多くが川から取られています。

つまり、川は暮らしを支えてくれる存在であり、生きていくためになくてはならないものです。

また、季節や天気、場所でそのようすを大きく変え、思い通りにならないことがよくあります。性格を持ち、気分が変わる人間のようでもあります。

つまり、川は「カムイ」なのです。そして川にはワㇰカウシカムイ（水のカムイ）やミントチカムイ（精霊のようなもの）などが暮らしているのです。

さらに、上流には高い山があり、そこには山の神（キムンカムイ）がいました。

現代になり、川とのつきあい方も川のすがたも変わりました。今の川に、カムイたちを見つけられるでしょうか？

「マレック（マレㇰ）漁の集い」で漁の前におこなわれるカムイノミ。北海道ウタリ協会上士幌支部。（上士幌町・東泉園）

サケをとる前の儀式

アイヌ文化では、サケ（カムイチェㇷﾟ：カムイの魚）が川をのぼり始め、漁を始める時、「アシリ・チェㇷﾟ・ノミ（新しいサケをむかえる時のカムイへの祈り）」をおこないます。

こうしたカムイへの祈り（カムイノミ）の時には、それぞれのカムイに、木をけずって作った「イナウ（カムイに言葉をきちんと伝えるための祭祀具）」[※5]をささげます。

サケをとる時の「礼儀」

サケを網やマレㇰでつかまえ、舟や陸にあげると、太さ2～3㎝、長さ30～40㎝くらいの「イパキㇰニ」と名づけられた木の棒で、頭をたたいて殺します。

ただ、このイパキㇰニはただの棒ではなく、「イナウ」でもあります。サケに、感謝の気持ちを伝えるものなのです。

また、サケをとるときにはとりつくさないで、川の上流に住む人たちの分や、サケを食べる動物の分も残されていたといいます。

そうすることで、川や自然のめぐみ（サケや動物）をとる暮らしを、みんなでずっと続けていくことができるようになっていました。

今でもサケを殺すのに、木の棒を利用する。固さや重さなどからしても、木の棒がちょうどいいという。（サケをふ化して増やすための捕獲場）

※4　何かの目的（なにかのもくてき）：人にとってありがたい目的ばかりではなく、例えばパートゥムカムイは病気（とくに伝染病）をまくという目的を持っている。
※5　祭祀具（さいしぐ）：神々などをまつるための道具。